

第29回 くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート

ベートーヴェン生誕250年(2020)プロジェクト Vol.5

小菅 優の“ベートーヴェン詣”



© Yuji Hori

川久保 暁紀



川本 嘉子



趙 静

© Marco Borggreve



2016年6月12日(日) 午後2時開演
一橋大学兼松講堂

主催:ボランティアチーム如水コンサート企画

後援:(社)如水会・新三木会・国立市・国立市教育委員会・国立市社会福祉協議会・(公財)くにたち文化・スポーツ振興財団・国立市商工会
国立市観光まちづくり協会・国立市商業協同組合・国立商工振興(株)・国際ソロプチミストくにたち
協力:一橋大学管弦楽団、「Café ここのたの」(一橋大まちづくりサークル)

ご挨拶

2005年から始まった「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」は、12年目、第29回目を迎えました。皆さまのご支援を心から感謝申し上げます。

月並みの名曲コンサートではなく、大学の講堂で行なうに相応しいテーマを掲げたコンサートを目指していますが、そのテーマの1つが2012年からスタートした「ベートーヴェン生誕250年(2020)プロジェクト・シリーズ」。毎回、一流の演奏家をお招きして、この楽聖の知られざる一面にもスポットを当てつつ彼の生涯を辿るものです。

その第5回目となる今回は、ピアニストの小菅優さんと素晴らしい仲間の皆さんをお迎えしました。

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ(全32曲)の演奏会(東京・大阪)を2010年から15年にかけて行なうと共にCD録音も完成した今、小菅さんは次のように述べています。

『私のベートーヴェンとの旅はここで終わるのではなく、…ベートーヴェンの生誕250年の2020年に向かって、ベートーヴェンの室内楽や歌曲などピアノ付の作品を全曲徐々に取り上げ、皆様と一緒に旅を続けたいと思います。この新たなプロジェクトには、作品一つ一つに尊敬の念をこめて「ベートーヴェン詣」と名付けました。知られざる名作を発掘していきながら、たくさんの素晴らしい曲の数々を皆様にお届けします。』

本日演奏される「ピアノ四重奏曲」は、ベートーヴェン14歳(1785年)の作品で“楽聖”の将来を予感させる“知られざる名作”です。また、共演する3人の弦楽器奏者の皆さんは何れも素晴らしいキャリアの方々で、小菅優さんとはそれぞれ共演の機会も多いのですが、多忙を極める4人のミュージズがそろって一堂に会するのは大変珍しいとのこと。この貴重なステージをごゆっくりお楽しみ頂ければ幸いです。

なお、桐朋学園大学音楽学部教授の西原稔先生には、当初からこの「ベートーヴェンプロジェクト・シリーズ」の監修とナビゲーターをお引受けいただいております。改めて厚く御礼申し上げます。

ボランティアチーム 如水コンサート企画

LUDWIG VAN BEETHOVEN (1770~1827)

ピアノ四重奏曲 二長調 WoO.36-2 (1785)

- I. Allegro moderato
- II. Andante con moto
- III. Rondo. Allegro

ピアノ・ソナタ 第17番 二短調 Op.31-2「テンペスト」(1801~02)

- I. Largo - Allegro
- II. Adagio
- III. Allegretto

休憩

ピアノ・ソナタ 第1番 へ短調 Op.2-1 (1795)

- I. Allegro
- II. Adagio
- III. Menuetto. Allegretto
- IV. Prestissimo

ピアノ四重奏曲 八長調 WoO.36-3 (1785)

- I. Allegro vivace
- II. Adagio con espressione
- III. Rondo. Allegro



中庭に面した明るく落ち着いた
雰囲気店内でイタリア料理を
お楽しみください

お電話でのご予約をおすすめします

レストランテ国立文流 TEL.042-571-5552

東京都国立市東 1-6-30 パティオマグノリア1F(JR 国立駅(南口)より徒歩3分)

◆営業時間：昼 11:30 ~ 14:30(L.O.) 夜 17:00 ~ 21:00(L.O.)

◆姉妹店 リストランテ高田馬場文流 TEL.03-3208-5447



Profile

小菅 優 YU KOSUGE (PIANO)



©Marco Borggreve

現在ヨーロッパで、高度なテクニックと美しい音色、若々しい感性と深い楽曲理解で最も注目を浴びている若手ピアニストの一人。

1983年東京生まれ。東京音大付属音楽教室を経て、93年よりヨーロッパ在住。9歳よりリサイタルを開き、オーケストラと共演。ヨーロッパで研鑽を積みながら次々と演奏活動を重ね、その足跡はベルリン、ハンブルク、ミュンヘン、ウィーン、ザルツブルク、パリ、アムステルダム、ブリュッセル、チューリッヒ、モスクワ、アメリカなど、年に40カ所以上に及ぶ。2005年カーネギー・ホールで、翌06年にはザルツブルク音楽祭でそれぞれリサイタル・デビュー。

ドミトリエフ、デュトワ、小澤等の指揮でベルリン響、フランクフルト放送響、シュトゥットガルト放送響等と共演。10年ザルツブルク音楽祭でポゴレリッチの代役としてヘレヴェッヘ指揮カメラータ・ザルツブルクと共演。13年ロンドン、ウィグモア・ホールでリサイタル。2010年から15年にはベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会(全8回)を東京、大阪で行い各方面から絶賛を博した。さらに現在はソロだけでなく室内楽や歌曲伴奏を含むベートーヴェンのすべてのピアノ付き作品を徐々に取り上げる新企画「ベートーヴェン詣」に取り組んでいる。第13回新日鉄音楽賞、04年アメリカ・ワシントン賞、第8回ホテルオークラ音楽賞、第17回出光音楽賞を受賞。14年、第64回芸術選奨音楽部門文部科学大臣新人賞受賞。

録音は最新盤の「ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ集第5巻『極限』」を含む15枚のCDをソニーより、また「リヒャルト・シュトラウス&フランツ・シュトラウス ホルン&ピアノ作品集」(オクタヴィア・レコード)、「モーツァルト：ピアノと管弦楽のためのロンド 他」(ワーナーミュージック・ジャパン)をリリースしている。

川久保 賜紀 TAMAKI KAWAKUBO (VIOLIN)



©Yuji Hori

2002年チャイコフスキー国際コンクール最高位入賞(1位なしの2位)。2001年サラサーテ国際ヴァイオリン・コンクール優勝。

幼少時をアメリカで過ごし、主要な北米オーケストラと共演するなど、豊富なステージ経験を積む。1997年チョン・ミョンファン指揮アジア・フィルのソリストとして初来日。以来、定期的に来日し、日本の主要オーケストラと共演を重ねるほか、ザンデルリンク指揮ドレスデン・フィルなどの日本公演のソリストに迎えられ、高度な技術と作品の品位を尊ぶ深い音楽性に高い評価を得ている。近年はワシントンや淡路島で自ら企画するコンサートを行うなど、コンサート・プロデューサーとしての才能も発揮。最新CD「アンコール!」(エイベックス・クラシックス)。使用楽器は、1779年製ジョヴァンニ・パティスタ・グァダニーニ(S&R財団貸与)。ミュンヘン在住。

川本 嘉子 YOSHIKO KAWAMOTO (VIOLA)



1992年ジュネーヴ国際コンクール・ヴィオラ部門最高位。96年村松賞、97年第7回新日鉄音楽賞・フレッシュアーティスト賞受賞。ソリスト・室内楽奏者として最も活躍しているヴィオラ奏者の1人。京都アルティ弦楽四重奏団、AOIレジデンス・クワルテットのメンバー。91年東京都交響楽団に入団。99年より2002年退団まで首席奏者を務める。

タンゲルウッド、マールボロ、ダボス、東京の夏、霧島音楽祭、サイトウキネン、小澤音楽塾、水戸室内管、アルゲリッチ音楽祭等に参加し、アルゲリッチやユーリ・バシメットなど世界一流のソリスト達と共演し絶賛を博している。ソリストとしても、これまでにガリー・ベルティエ、ジャン・フルネ等の著名な指揮者と共演。

趙 静 JING ZHAO (VIOLONCELLO)



2005年、超難関のミュンヘンARD国際音楽コンクールで第1位と聴衆賞を獲得。北京に生まれ、5歳よりチェロを始め、東京音大附属高校に留学後、1999年、小澤征爾の助力でカラヤン・アカデミーに留学。ロストロポーヴィチやヨーヨー・マからも学んだ。

小澤征爾、マゼール、ムーティ、ネルソンス、チョン・ミョンファン、プレトニョフら世界の一流指揮者や、N響、北ドイツ放送響、バイエルン放送響、ミラノ・スカラ座フィル、シドニー響など多くの名門オーケストラと共演を重ねている。室内楽では、パコ、樫本大進、メイエ、ベレゾフスキーらと共演。アルゲリッチに愛され、ルガーノ・フェスティバルの常連ゲストとなっている。宋濤、堀了介、ゲオルク・ファウスト、マリオ・ブルネロ、ダヴィッド・ゲリンガスの各氏に師事。使用楽器はストラディヴァリウス(民間の財団の貸与)。

西原 稔 MINORU NISHIHARA (NAVIGATOR)



山形県生まれ。東京藝術大学大学院博士課程満期修了。桐朋学園大学音楽学部教授。18、19世紀を主対象に音楽社会史や音楽思想史を専攻。著書に『音楽家の社会史』、『聖なるイメージの音楽』、『音楽史ほんとうの話』、『ブラームス』、『シューマン全ピアノ作品の研究』(以上、音楽之友社)、『クラシック名曲を生んだ恋物語』(講談社)、『楽聖』ベートーヴェンの誕生』(平凡社)、『クラシックでわかる世界史』、『ピアノ大陸ヨーロッパ』(以上、アルテスパブリッシング)、『世界史でたどる名作オペラ』(東京堂出版)、『ピアノの誕生・増補版』(青弓社)などの著書のほかに、共著・共編で『ベートーヴェン事典』(東京書籍)、訳書に『魔笛とウィーン』(平凡社)、監訳・共訳で『ルル』、『金色のソナタ』(以上、音楽之友社)、『オペラ事典』、『ベートーヴェン事典』(以上、平凡社)などがある。

Program Note

(演奏順と異なります)

＜ベートーヴェンのピアノ四重奏曲＞

ベートーヴェンは二重奏から八重奏の様々な編成による室内楽を100曲ほど書いているが、弦楽四重奏曲・ピアノ三重奏曲・チェロソナタは、生涯に亘って作曲し続けたのに対し、ピアノ四重奏曲は、1785年、故郷ボンでの少年時代(14歳)に初めて本格的な室内楽作品として書いた3曲(WoO.36-1~3)と、1796年、ウィーンで作曲した変ホ長調(Op.16)〔ピアノと管楽器のための五重奏曲の自作編曲版〕の僅か4曲にとどまる。

この3曲が作曲された1785年当時は、ハイドンやモーツァルトが活躍していた時期であるが、ハイドンにはピアノ四重奏曲はなく、モーツァルトは僅か2曲だが、K.478(1785年)とK.493(1786年)の傑作を残している。奇しくもベートーヴェン少年の作曲と時期が重なっているのは興味深い。とはいえ、彼らがピアノ四重奏曲をこれ以上手掛けなかったのは、この楽器編成が時流にそぐわず、時代遅れと受け止めていたのかもしれない。(尤も、時代がやや下がって、シューマン、ブラームスになるとこのジャンルの名曲が再び登場してくるのだが…。)

ピアノ四重奏曲 二長調 WoO.36-2 (1785)

3曲の中では最も明朗闊達で、モーツァルト的な気分に満ちている。急一緩一急という一般的な3楽章構成。ソナタ形式による第1楽章・第2楽章ともピアノが優位にあり、協奏曲風の趣がある。嬰へ短調の緩徐楽章は、少年・ベートーヴェンとも思えない情感を漂わせている。第3楽章は優美なロンド主題が軽快に進む。

ピアノ四重奏曲 ハ長調 WoO.36-3 (1785)

この曲の第1楽章と第2楽章の主題が、10年後(1795年)に作曲される初期のピアノ・ソナタ2曲(Op.2-1、Op.2-3)にそのままの形で現れて来るが、ウィーンで発表したこれらのピアノ・ソナタは、故郷ボン時代からジックリと構想していたのであろう。

快調にスタートする第1楽章の第1主題の後に現れる陰影を帯びた第2主題は、ピアノ・ソナタ第3番(Op.2-3)の第1楽章に同じ形で登場。第2楽章の抒情溢れる主題は、本日演奏されるピアノ・ソナタ第1番(Op.2-1)の第2楽章冒頭に現れる。

小菅優さんはこう述べている。「実は、1番のソナタを勉強したときから、いつかこのピアノ四重奏曲とつなげて演奏してみたいと思っていました。6年前から考えていたことが、やっと今回実現します。」(＜小菅優さんへのインタビュー＞参照) (主催者事務局)

ピアノ・ソナタ 第1番 へ短調 Op.2-1 (1795)

1792年、ベートーヴェンはウィーンにて本格的な音楽活動を開始し、まずはピアニストとしての名声を博した。それまで主流だった、モーツァルトに代表されるチェンバロ奏法とは異なり、彼のピアノ演奏はレガート奏法とカンタービレ奏法によるもので、当時の聴衆には新鮮な響きであった。しかし、ベートーヴェンは作曲を何より重視したため、作曲家のハイドンのほか、ヨハン・シェンク、対位法の大家ヨハン・G・アルブレヒツベルガーらに師事し、非常に多くの習作を残した。《ピアノ・ソナタ第1番》は、こうしたウィーンでの華々しいデビューの時期に、《第2番》、《第3番》とともに作品2として書かれ、作曲の師ハイドンに献呈された。いずれのソナタも4楽章構成を取り、モーツァルトやハイドンのソナタとはかけ離れた様式を持ち、音楽内容も類例を見ないものである。師ハイドンは、どのような心持ちでこの作品を聞きたらうか。

ピアノ・ソナタ 第17番 二短調 Op.31-2《テンペスト》(1801~02)

《ピアノ・ソナタ第17番》は、《第16番》、《第18番》とともに作品31として書かれた。時期は、ベートーヴェンがハイドンやモーツァルトの手法を用いつつ、1803年以後の《交響曲第3番》「英雄」(1803)などの「傑作の森」に至るまでの過渡期に当たる。ベートーヴェンに師事し信頼も厚かったカール・ツェルニーによると、ベートーヴェンは作品31を作曲する際、「自分は今までの創作には満足していない。この作品で新しい道を目指すつもりだ」と語っていた。この時、ベートーヴェンは交響曲、ヴァイオリン・ソナタ、ピアノ・ソナタなど大曲を次々と完成させていく中で難聴は悪化を辿り、その苦悶からあの有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」をしたためていた。作品31のなかでも、特に革新的で劇的な《第17番》には、そうしたベートーヴェンの決意を感じることができる。

ところで、このソナタが《テンペスト》と呼ばれているのは、周知の如く、弟子のアントン・シントラーの著したベートーヴェンの伝記の中の、「この曲を理解するには、シェークスピアの『テンペスト』を読め」とベートーヴェンが述べたという記述に拠っている。ところが近年の研究ではシントラーの書いた伝記は捏造まみれと立証されている(小宮正安『音楽史 影の仕掛け人』による)。それはさておき、このソナタをかくも有名にしたのはシントラーの“功績”のお陰でもあろうか。

(神竹喜重子)

神竹喜重子

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・非常勤研究員、一橋大学経済研究所ロシア研究センター・専属研究員、及び一橋大学大学院言語社会研究科・博士研究員。博士(学術)。専門は19世紀末から20世紀初期のロシア音楽文化史。論文に「マリエッタ・シャギニャンのセルゲイ・ラフマニノフ論：1912年の『S・V・ラフマニノフ：音楽心理的スケッチ』」など。

小菅優、“ベートーヴェン詣”を語る——兼松講堂公演に寄せて

聞き手：高坂はる香(音楽ライター)

— 2010年から行ってきた東京・大阪それぞれ8回に亘るベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会が先に最終回を迎え、また並行して行なわれていたCD録音も完成したところですが、再び「ベートーヴェン詣」と題した新シリーズを始められます。引き続きベートーヴェンに取り組まれるのはなぜでしょうか？

他の作曲家を演奏しながらも、同時にベートーヴェンはずっと弾き続けたいと思っています。ベートーヴェンは私にとって、人生をともに歩んでいく作曲家です。ピアノ・ソロの曲だけでなく、協奏曲、室内楽、歌曲と、発掘していくと素晴らしい作品がたくさんあります。「ベートーヴェン詣」は、“一つ一つの曲に尊敬の念をもって詣でる”という気持ちで臨むプロジェクトです。それぞれの作品の魅力を精一杯引き出したいと思っています。

今回演奏する「ピアノ四重奏曲」はあまり演奏される機会がありませんが、とても魅力のある作品です。若い頃に書かれているので、今後の成長を感じさせる部分もありますが、同時にすでにベートーヴェンらしさがはっきり現れています。シンプルで、メロディやハーモニーがあまり動かないので、それをどのように表現するかも難しいところ。だからこそ、素晴らしい共演者を集めなくてはと思い、昔から信頼している3人をお願いしました。

— 共演者のお三方は、小菅さんにとってそれぞれどのような存在ですか？

ヴァイオリンの川久保賜紀さんとは、以前から室内楽でよく共演していて、去年はドイツで10公演ほどのツアーと一緒に回りました。今度アメリカで、ベートーヴェンのトリプル・コンチェルトを共演します。**ヴィオラの川本嘉子さん**とは、(長らく共演を重ねているヴァイオリニストの) 榎本大進さんを通して知り合いました。水戸室内管弦楽団やサイトウ・キネン・オーケストラなどで何度も共演しています。

そして、**チェロの趙静さん**と最初に会ったのは、私がまだ12歳のとき。日本で行われた日独交流コンサートに、私はドイツの代表としてトリオで出演しました。そのパーティーで、当時高校生だった趙静さんが、すごい天才チェリストだという紹介で演奏を披露していました。その演奏がものすごくよかったのを今も覚えています！それからしばらく会う機会がありませんでしたが、20代になって再会し、共演するようになりました。

— 女性4人のクアルテットですが、みなさんには音楽的な共通点などありますか？

それぞれ個性はまったく違いますが、共通しているのは、温かい人間的な音楽を好んでいるところです。あとは、全員あまり女性っぽくないかも(笑)。そして動物的な部分があるというか、感覚がいいと思います。

— ……では、それぞれを動物に例えると？

それはちょっとわかりません(笑)。変なこと言ったら怒られちゃうので！

— ところで、ベートーヴェンのソナタ全曲録音と演奏会を終えて、新しい発見はありましたか？

ベートーヴェンは葛藤を抱えて生きていた人ですが、まじめさの中に、ユーモアや皮肉、ひねくれた部分など、人間らしいところがあると感じるようになりました。

32曲の一連のソナタは、徐々にロマン派に近づいていくというよりは、いろいろな要素が混在する形で発展していると思います。後期ソナタにバロックや古典派の影響が見えたり、中期でもかなり斬新なところがあったり。例えばシェイクスピアからの影響が表れている作品もあります。

画家のカンディンスキーにも同じものを感じますが、まるでカメレオンのように変化する多様な作品を書いているので、全作品を見ていくことで、答えだけでなく謎も増えていきました。ベートーヴェンはさまざまなことを哲学的に考えた人だと思いますが、最終的には、人間へのメッセージと平和への訴えを、音楽を通して表現しています。

— 今回はピアノ四重奏曲とソナタによるプログラムです。それぞれの作品についての考えをお聞かせください。

二長調のピアノ四重奏曲と、二短調のピアノ・ソナタ「テンペスト」は、雰囲気も作曲時期も異なる2曲です。「テンペスト」には、中期の斬新さがあちこちで見られます。男らしく力強い面もあれば繊細な面もある。倍音や不協和音の響きを楽しむようなところがあって、ペダルの効果ひとつで、全く違う世界になってしまうような表現にもなります。幻想的な作品です。

ピアノ・ソナタ第1番には、他の作品で使われているいろいろなメロディが現れます。初期作品でありながら中期のような深さがあり、ダイナミクスが繊細です。今回演奏する八長調のピアノ四重奏曲の2楽章と同じメロディも登場しますが、四重奏曲では古典的な進行だったものが、ソナタで使われるときには儂いハーモニーで進行していき、優しさが増しています。聴き比べると感動します。

実は、1番のソナタを勉強したときから、いつかこのピアノ四重奏曲とつなげて演奏してみたいと思っていました。6年前から考えていたことが、やっと今回実現します。

兼松講堂は、歴史のある素敵なホールだと聞いているので楽しみです。今回の演奏会では、信頼している仲間たちと、この場所でしか起きない対話をできたらと思っています。

* 聞き手の音楽ライター・高坂はる香さんは、一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了。

(株)シヨパンに勤務、「月刊シヨパン」編集長を務めた後、現在、クラシック音楽のフリーライターとして内外の著名音楽コンクールでも活躍する傍ら、大学院時代のテーマでもあったインド関係のプロジェクトにも取り組んでいる。

次回コンサートのご案内

第30回「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」 ベートーヴェン生誕250年(2020)プロジェクト Vol.6 ～藝大の精鋭たちのベートーヴェン～

『東京藝大シンフォニーオーケストラ演奏会』

☆兼松講堂で聴く主要音楽大学のオーケストラ・シリーズ第2弾。前回(2013. 11)の桐朋学園オーケストラ(指揮:沼尻竜典、Vn:戸田弥生)に次いで、藝大の教授陣と精鋭たちが登場!

指揮:澤 和樹 ピアノ:迫 昭嘉
曲 目:モーツァルト「フィガロの結婚」序曲
 ベートーヴェン「ピアノ協奏曲第3番」八短調 Op.37
 「交響曲第3番〈英雄〉」変ホ長調 Op.55

2016年11月13日(日) 開演14:00

【入 場 料】 前売券 S席 4,000円(指定) A席 3,000円(自由) 学生券 1,000円(自由)

【チケット発売】 7月1日(予定)

【お 求 め】 ■電話予約: NPOおんがくの共同作業場 ☎042-522-3943
■国立市内販売店: 「白十字」南口店・一橋大生協(西ショップ)・芸小ホール ほか
■ホームページからもお申込みいただけます。

<http://www.josuikai.net/circle/josuiconcert/>

如水コンサート企画

検索

☆一般発売(7/1)に先だって、本日、兼松講堂2階ロビーにて特別販売をいたします。

*今後のコンサートをお早めにご案内いたします。ご希望の方はアンケート用紙にご住所・お名前・メールアドレスをご記入ください。

“コンサート・ホール”一橋大学兼松講堂

一橋大学のシンボリック建物・兼松講堂(政府登録有形文化財)は、その響きの良さから創建(1927年)以来、内外の代表的音楽家が多数来演、近年ではチェコ・フィル(指揮アシュケナージ)やウィーンフィル・ベルリンフィルのトップ奏者たちが演奏するなど、コンサート・ホールとしても親しまれています。

戦前・戦後から今日まで、ピアニストでは、原智恵子、安川加寿子、田中希代子、ラド・ルプー、イングリット・ヘブラー、アシュケナージ、園田高弘、イングリット・フリッター、伊藤恵、野平一郎等々、往年の名演奏家や現代の第一線の人たちが多数来演しています。

2004年3月、社団法人・如水会(一橋大学の同窓会組織)による募金で77年ぶりに音響的にも配慮された大改修が行われ、自然な響きを持った本格的なコンサート・ホールとして蘇ったのを機に、翌2005年から「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」が定期的に行われています。



～生菓子も焼菓子も‘くにたち’がいっぱい詰まっています～

‘くにたち’らしい‘くにたち’だけのお菓子がここにはあります



洋菓子

国立 白 十 字

南口店 国立市中1-9-43 042(572)0416
富士見台店 国立市富士見台1-37-28 042(572)1718



ワインは生きています。

作り手から預かった大切なお酒を
最高の状態でお客様にお届けしたい。

地下の低温ワインセラーでは
徹底した品質管理で作り手の真心と
風味へのこだわりを守っています。

SAKE-BOUTIQUE 国立駅より徒歩1分
SEKIYA [1F] 10:00-21:30
[B1F] 11:00-21:00

